

新型コロナウイルス感染症診療を振り返って

——これまでの経過と今後の展望——



栗山赤十字病院
院長 深江 淳 副院長

令和3年10月初旬、国内では、新型コロナウイルス感染症流行の第5波が落ち着きつつあります。しかし、今後も新たな変異株の出現、流行には警戒を要します。

当院では1年前、令和2年11月より新型コロナウイルス感染症診療を開始しています。当時は流行の第3波のはじまりの時期で、このあと急速に大きな波となり、当院でもこの未知の疾患に全力で対応を開始していました。

手探りで対応を模索

当院では、地域の医療を担う使

命より、令和2年夏頃より準備を進めました。

当時はワクチンもなく、診療も手探りの時期でした。この感染症を診断するために、ウイルスそのものを検出する必要があります。当初は機器の入手にも苦労しましたが、有効利用する方法を検討し、シミュレーションを繰り返しました。院内では各部門が危機感を持ち、一丸となって診療方法の構築に取り組んでいました。プレハブ外来棟も当時は品薄でしたがどうか設置し、診療方法を構築したのと同時に、院内では病床の

一部を隔離病床に転用し、入院治療も行えるように準備しました。

令和2年11月に発熱外来と入院治療を開始したところ、直後から陽性の方への対応が必要な状況に陥りました。それまでに、今思えば比較的規模の小さい第1、2波を経験していましたが、あれよという間に陽性者は急増し、令和2年の年末をまたぐ大きな第3波につながったのです。複数の医療施設にクラスターが発生しダウンする状況のなか、当院では強い緊張感が年末も含めて数カ月続きました。当時は初期的な治療法も確立されておらず、保健所との相談、他病院との連携を駆使して何とか乗り切ることができました。

しかし^{※1}2類感染症に分類されている本症は基本的治療には入院対応が原則であったことから、入院できない療養者は経過観察する以外に方法がなく、当時から外来での治療方法、また、ワクチン普及を現場から切に願っていました。



プレハブ外来棟内部

ワクチンの普及と第5波の拡大

ワクチン導入はいつになるのか？焦燥感が強まるなか、令和3年3月、ようやく医療従事者への試験的導入が開始となりました。しかしながら、ほぼ同時に流行の第4波が始まりました。加えてこの流行期から変異株が注目されるようになりました。このウイルスは容易に自分の遺伝情報を変化させ、結果、人間の免疫防御から逃れて増殖するのです。これによりワクチンの効果が減弱してしまいう可能性も指摘されていました。しかし、それでもワクチンは本症の切り札であり、第4波のなか、町では高齢者から投与を開始し、急ピッチで普及しました。

導入されたワクチンは、^{※2}mRNAを成分とした新しい仕組みのものになります。保存条件が厳しく、このための冷凍庫の普及、また地方自治体による投与計画など、複雑な問題がからみ、開始には行政、医療施設、関係各所で大変な調節が必要でした。当院は、一般高齢者、施設入所者に対応しワクチン普及のお手伝いをさせていただきました。これらの人たちには今に至るまでクラスターが生じておらず、正直安堵していますが、引き続き警戒を怠らずに対応を続けた

いと考えています。

第5波は、デルタ株と呼ばれる新たな変異株が主体となり、国内ではこれまでで最大の流行となりました。第4波までの状況と異なるのは、感染する世代が若年化したことです。これには高齢者へのワクチン普及が大きな理由とされますが、若年化したことにより家族間感染や職場・学校での感染が増え、また都市部に集中する傾向がありました。陽性者数は大規模となり、それに伴い療養者、重症者の数も全国で増加しました。逆に死に至る割合は低下して

ます。承認薬が増えても、実際どのように投与することがベストなのかは今も検討されています。現在、入院治療については概ね系統立った治療を行えるようになりました。また、抗体療法という人工的に製造した中和抗体を使った外来治療の方針も出てきています。後者は現時点においては限定された地域、施設のみでの使用となっていますが、当院も使用条件に準じており、今後の外来治療についても検討中です。

当院では、これまでの入院治療において、幸い院内クラスターの発生を起こさず診療を続けてきました。しかしながら、クラスターは常に発生する可能性があります。また、ワクチンが普及したとはいえ^{※3}アウトブレイク感染の危険性が指摘されています。こうした考えを基に、当院では現在も対応を続けています。

確立される治療方針

当初は治療法が事実上存在しなかった病気ですが、第4波、第5波の間に国内承認薬が増えてきてい



ワクチン接種リハーサル

これから感染症対策

今後の予測される経過について、推測も踏まえ、少し考えてみたいと思います。新型コロナウイルス感染症そのものは、今後も変異株の出現や、人の移動が増えるにつれて再流行する可能性がまだ

まだあると思われます。行動の活性化は社会にとつて必要なことではありますが、感染予防を忘れず、これからも注意を怠らないでいただきたいと考えています。具体的にはマスク、手洗い、密の回避などです。ちなみに令和2年はインフルエンザ流行が非常に抑えられていますが、予防対応の副産物と考えられ、これらの対応が感染症にとつて、いかに重要か分かります。今後、新型コロナウイルスとインフルエンザの同時流行という事態も考えられます。感染予防は続けることが必要です。

新型コロナウイルス感染症は早期発見が重要です。ワクチン普及に伴ってアウトブレイク感染を起こし無症状、軽症例も増えているようです。発熱、風邪の症状が生じた場合、この感染症の可能性を頭の中に入れておくください。当院では発熱外来を平日午後16時に開いていますので、午前中にご連絡ください。また、医師判断により夜間、休日でも対応することがあります。

ワクチン接種にはさまざまな情報があり、一部ではマイナス面を強調するものもあります。しかし、全世界に共通する見解は、ワクチン

ン接種がこの感染症と戦う有効な手段であるということです。今後、ワクチンで得た免疫の維持のために、追加接種の方針が国より出されると考えられます。前述のようにワクチンは個々の発症を完全には抑えられない場合もありますが、社会全体の流行を防ぐ効果があるのは間違いありません。また、発症した場合でも、それを重症化させない効果も期待されています。

当院は、今後も可能な限り同疾患に対応していきます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

【問い合わせ】

栗山赤十字病院（発熱外来）

☎ 5084

平日 午前8時半～午後12時半

※1 感染力・重篤度・危険性が高い感染症のこと。

※2 ウイルスが体に入るための「スパイク」を作る設計図。ヒトの細胞にスパイクを作らせることで免疫反応を起こし、ウイルスの抗体を作らせる。

※3 一定の期間・場所で、通常よりも多くの感染症が発生すること。